

2019年度 個人研究実績・成果報告書

2020年 4月 29日

所属・職名	基盤教育機構 専任講師	氏名	柘岡 大輔
研究課題	次世代型社会における基盤教育のための基礎研究		
研究キーワード	世界の分与性 Participation と個人の意思と信用性 Individual Will and Credibility	当年度計画に対する達成度	3.概ね順調に研究が進展し、一定の成果を達成したが、一部に遅れ等が発生した
<p>1. 研究成果の概要</p> <p>コロナ禍が露呈したのは、まさしく、ハイデガー的な「世界の暴露性」にほかならない。日常的な生活経路の遮断、死の恐怖が人間を実存へと立ち返らせる。死の切迫性が世界の世界性の暴露の自覚を促進する。「実存」もまた、西欧的な意味と日本的な意味とでは異なる。これを「武士」的意味においてとらえる可能性はある。だがその本質を問うことが肝要である。西欧と日本の本質的紐帯を見出そうとした遠藤隆吉の哲学研究にそのヒントがあるのではないか。これが次年度研究の主軸となる。</p> <p>さしあたって、今年度研究成果として見出されたキーワードとして、〈世界の分与性 Participation of the world〉と〈個人の意思と信用性 Individual Will and Credibility〉を挙げておく。</p> <p>世界の暴露性が示すのは、世界そのもの—生存そのもの—においては単独的で分立した「世界」はありえず、ただどこまでも、関係ないし存在平野としての世界の分与性が広がっているということだ。すべては通過していく。(Panta rei) 近現代量子力学でさえ存在は「ゆらぎ」の「場」とされる。不可視的で科学的にとらえきることのできない「場」。現象学的に言えばこれは意識の運動そのもの(体験流)・意識の相関者及び相関作用を指すが、フッサールはしたがって存在範疇さえも超越・世界の「所与性」と捉えた。実際には、(つまり方法的独我論的な現象学的認識としてではなく、より関主観的には)世界の分与性なのである。ある人間にとってだけでなく、常に他の存在者と同時にある分有の事実がある。その分有解釈がいつでも問題となる。その〈所与/分与〉の在り方は是非こそが問題なのである。</p> <p>この世界の分与性を認識し、承認或いは否認し、解釈し方向付ける主体が個人の意志 Will of Individuality である。個人は〈欲望〉の在り方によって存在様態を変えるが、結局のところ、その行為や意志や価値を決定づけているものは、相対的ないし絶対的な意味での信用性にほかならない。自他への信用性、自他からの信用性が、個人の世界の分与性を支える。</p> <p>〈信〉を失った社会、個人の未来を支える原理論的認識が今一度問い直されなくてはならない。</p> <p>2. 著書・論文・学会発表等 (海外研究機関等の研究者との国際共著論文がある場合は必ず記載) 特になし。</p> <p>3. 主な経費 コロナの影響を受けてほとんど執行を断念せざるを得なくなってしまった。</p> <p>4. その他の特筆すべき事項 (表彰、研究資金の受入状況等) 特になし。</p> <p style="text-align: right;">(本文は1ページ以内にまとめること)</p>			